

29. 海の日に、母をおもう

医事万華鏡

今年も「海の日」がやってきました。また7月に入り、全国的に海開きがスタートしました。海水浴に出かけられる方も増えるでしょうが、水難事故にだけは注意いただきたいものです。

ところで、海の日と聞いて、私自身はふと母について想起したりします。具体的に母が海が好きだったとかいう思ひ出話ではありません。もちろん、母なる海、母なる大地という言葉があるように、私が抱くこのイメージはありきたりでもありません。実に、古より生み育てる自然は、「母」の象徴でもありました。ただ私の中で、海と母のイメージが見事に調和するのです。

そんな海、そして水は人の深層心理とも関わり、想像性を喚起するものでもあるようです。まさにイメージションの世界です。とすれば、母性的なものもすなわち、想像性に関与するということです。「海||母||想像性」ということでしょう。

ところで、このイメージションというのは、癒しに繋がるものと考えられています。スイスの精神科医であるC・G・ユングは、アクティブ・イメージション（能動的想像）

を提唱し、イメージションを通して主体的に無意識と対話を深めていき、意識全体の癒しや統合を目指しました。実に、これは偉大な芸術家に見られるように、自身の内面との度重なる対話の成果が作品であり、その作品を完成させたとき当人は達成感を得ると同時に癒された、というのと同じ営みです。つまり、イメージションは救いや癒しをもたらすということです。「海||母||想像性」、そしてここに「癒し」が加わるといわけです。もちろんその想像力は、同時にまた創造力であることは改めて言うまでもありません。

一方、科学的な知見によると、胎児を育む羊水は、海水のミネラルバランスとほぼ同じだといわれています。つまり、海の体験というのは、母親の胎内にいたときの原体験であるとも言えるでしょう。

さて、日本神話に登場する女神に、伊邪那岐の妻である伊邪那美がいます。伊邪那美に関しては、黄泉の国のエピソードがあまりに有名ではありますが、この女神はむしろ、国生み神話に因み、「生み（それまで無かったものを新たに作り出す、生じさせる）、海、産み（母体が胎児や卵を体外に出す（分娩））」の女神でもあります。つまり、伊邪那美は黄泉の国の支配者などではなく、創造的な母のシンボルでもあるのです。

海を身近に感じるこの季節。東の間、母と海との繋がりに思いを馳せられたらいかがでしょうか。

（JMS主幹・野村元久）

